

よってまとまり方が異なっていたが（分散したり、一つの道路にそって並んでいたり）商店の業種は食料品を中心とする日用品が多くみられた。衣料品や耐久消費財などは中心部の商店街で多く購入するようである。この中心商店街は鹿児島市の中心であるばかりでなく、鹿児島県においても重要な位置を占め、その中心性、中枢性は今後も強まり、地方中心都市という機能がますます強くなるものと思われる。

このように鹿児島市では郊外住宅地化が無計画に行なわれてきたが、今後も市街化区域内で人口増加が続くかぎり行なわれてゆくであろう。しかし、住宅地はできても交通、学校、病院等の住宅環境の整備がほとんどなされておらず、郊外住宅地に住む人々が満足するような環境ができるまでにはまだ多くの時間が必要と思われる。今後住宅地化が進むにつれて、新たな問題となってゆくのではないだろうか。

筑波研究学園都市付近の地域構造

— 商業活動を中心として —

山 本 恵 子

本論は茨城県南西部、筑波研究学園都市付近の地域構造を商業を通して明らかにすることを目的としている。研究地域の範囲は筑波郡谷田部町、大穂町、豊里町、筑波町、新治郡新治村、桜村の6ヶ町村でこれを一括して学園地区の名称で呼ぶことにする。

学園地区の商業地域構造の特徴はその階層化にある。すなわち地区の東に位置する大中心地土浦の商圏の傘下に地区内商業の発達は一著とは言えない。しかしその中にも幾つかの中・下級中心を認めることは出来るゆえに本論では商業地域構造を第1次から第4次までの4段階の中心地に区分した。商店分析の結果得られた各商業中心地の特徴は次の如くである。

第1次中心地……土浦。商店数が他中心地に比べ格段に多い。全類型に渡っての商店の均等的発達が見られる。専門店化が進み複合形態の店舗はほとんどない。喫茶店、バ一等の発達が著しい。

第2次中心地……谷田部、北条、上郷。飲食料品を扱う店が半分以上となる。上級中心と比べ商店数が激減する。

複合形態の店舗が急増する。喫茶店等は減少し、化粧品医薬品店も少なくなる。

第3次中心地……吉沼、大曾根、藤沢、沼田、小田。飲食料品店がさらに増加する。喫茶店等はほぼ姿を消す。2, 3の類型を除いては均等的分布を示すがもちろんこれらの絶対値は小さい。

第4次中心地……その他すべての集落。商店街はなく商店は集落内に散在する。飲食料品店がほとんどとなる。よろず屋的色彩が濃い。化粧品医薬品の他衣料品が扱われることはまれである。

学園地区に以上のような商業の階層化がもたらされた原因としては、この地の集落分布の現状、ひいてはそれを規制する自然環境、人文環境をあげることが出来る。桜川流域に広がる低地を別とすれば学園地区の大半は日本有数の平地林地帯を成す低平な台地の上に展開している。台地のゆえに水利が悪い。耕地として適さないから人々の生活も困難となる。それゆえ、現在この台地上には、中、小規模の集落が点在しているに過ぎないのである。また交通の発達によって集落が発展することは多い。しかしながら学園地区は鉄道間の飛び地として発展の波から取り残されてきた。そこで土浦を中心に広がるバス路線は確実に顧客をつかんでいくことになる。現在の土浦の繁栄の基盤はこうして築かれたのである。このように学園地区に於ける商業の地域構造の特殊性は、その背景に多種多様な自然条件、人的要因を配しながら形成されたものと言えよう。

目黒区南部一帯の住宅環境の研究

吉 田 晶 子

近年、環境問題が大きく注目されてきている。都市において、住機能は産業活動機能と共に基本的な都市機能である。私はこの住機能を住宅環境の面から考え、特に商店と高層住宅について分析してみた。

論文の構成は、I章でこの地域の発展の過程、人口、土地利用から住宅地としての性格を概観し、II章で住宅にとって大きなかわりを持つ自然環境・社会環境を分析し、III章は現在の東京都全体の住宅問題に少し触れて、この地域の住宅問題の参考とした。